老舗の街・尾張町シリーズ8

尾張町のルーツを探ねて

尾張町商人の発祥の地・尾張荒子の人々は今

荒子観音寺の多宝塔

目　次

はじめに …… 1
荒子の人々と尾張町商人の形成 …… 2
荒子のむかし …… 4
前田一族と荒子城 …… 5
荒子ごんげんの由来 …… 7
荒子観音とともに栄えた荒子町 …… 9
現代の中川区荒子界隈 …… 10
馬道具の保存にかける人々 …… 13
あとがき …… 16

さし絵　　村上隆氏（尾張町：村上洋品店社長）

はじめに

歴史の街・老舗の街として、私共の尾張町は自らの商店街を再認識し、先人の培って来た過去の蓄積を生かすべく、より以上の未来への可能性を歩み出しております。けれど、現在存続している地域は全てそれなりの貴重な歴史を得ていることも事実であり、尾張町だけが特別な存在でないことも確かなことです。

大事なのは「いま」「ここに」住んでいる人々が、自らの形成されて来た過程に対して〝誇り〟を持てるか、否かにあるのではないでしょうか。現在の金沢の個性を作り上げたのは、やはり近世に於ける前田利家というクサビが大きな刺激となり、抵抗と同化の中から新しい金沢人が育って来たのだと思います。

尾張町は名前が示すように、利家の出身地との関係が最も深かった故に、近代に至るまでは金沢商人の個性と〝誇り〟を持ち続けていたのだと信じます。そして現代の目まぐるしい情報化社会の中で、ともすれば日常的なものの中に埋没しがちな風潮に反し、歴史の視点を残し、その個性をまだまだ色濃く覚えている町並なのです。

歴史を遡のぼってみると、正和元年(1312)に初見される白山宮を本所とする紺掻(藍色で布地を染める人々)の集落だったとされる山崎村四市が前身とされています。これは金沢の発祥そのものに深く関わることを私達に示唆しています。

以来、この界隈は一向一揆衆の本拠の「おやま」となったり、近世の前田利家に始まる加賀百万石の城下町となったり、あるいは明治維新後の第9師団本部・第7連隊となったり、又戦後の四高から発展した金沢大学となったりして参りました。

一方、尾張町を加能郷土辞彙で調べると「……博伽雑談には、尾張荒子(現在の愛知県名古屋市中川区内)から引越した足軽・小者の住した所とし、加府事迹実録にも利家が荒子から召連れた下人の住所であったとするが、三州名跡志には、利家入城の時分、荒子で用命を承った町人を召寄せて居住せしめた所

であるとする」とされ、ここに町名の由来が遠く尾張名古屋より起因することが記されています。

今回のシリーズでは、尾張町の原点を探るべくこの利家出生の地といわれる荒子について少し詳しく紹介して行きたいと思います。

荒子の人々と尾張町商人の形成

前田利家が自らの出身である名古屋より連れて来たといわれる荒子商人も、初期の頃は荒子近在のちょっと頭の回転が早く、目端の効く人々であったのではないかと推察されます。実際、現在の荒子の人々に聞いても、前田利家は自らの出世に伴って、その最も信頼できる血縁・地縁の中から優秀な者を引き抜いていったきらいがあるのです。力の強い者は武士に取り立て、頭の回転の良い者は御用商人に取り立てて行くといった風にです。

ために、現在の荒子の人々は、その優秀な仲間の留守を守り続けた子孫の末裔であると信じています。又、利家について行った先祖達の功績によってこそ、現在の金沢が形成されたのだとの強い自負を持っています。

しかし、利家について荒子を出発して行った者達は、最初からいっぱしの商人となっていたのではないのです。力の強い者が最初は足軽から始めて、中でもさらに強い者が正規の武士に取り立てられて行ったように、彼等も最初は単に使い走りや資材調達の便利屋のような身分から始まっていたようなのです。そうした利便性からか、当初の尾張町はもっとお城寄りの大手町付近にあったのです。ようやく寛永１２年(1635)の大火を機に、成長し、より信頼されるようになった尾張町商人は現在地に移転して来るのです。

その過程は、彼等が新しい金沢の地で、前田利家の用事を勤めると共に、一方では地元の商い人との交流・刺激を通じて成長し、やがて両者の中から新しい尾張町商人というものが形成されて来たからなのです。

加賀百万石として、対外的にも対内的にも加賀藩の基礎が固まることは、同時に尾張町商人が御用商人として大手門の前の繁栄を引き受けることにもつながって来た次第です。以降、中心商店街として尾張町は北陸経済の重要な位置を占め、発展を担って来たのです。

商売の繁栄を目指す商人は、「いつかは尾張町に店を出そう.....!」の気概を持ち、又それを達成でき得た商人のみが集まったために、活気は一通りのものではなかったのです。

そして一旦店を持ったからには、尾張町に居り続けることに誇りを抱き、又その実績を子孫に遺すために堅実さを何よりも大事にして行ったことが、今の尾張町らしさにつながって来たと思われます。商いを確実に守り育てて来・守り育てて行く姿勢から、老舗の気風が生まれて来たともいえます。

こうした商人のありさまを端的に示すのは、資産の保全方法です。全てを投資に回すのではなく、不動産を確保したり、最も特徴的な方法として道具を収集することで趣味と実益を兼ねていたのです。百万石の工芸を支えた職人達が金沢の地で多く生活できたのは、上方の文化を吸収しようとするお殿様や高級

潘士の熱意だけでなく、堅実な商人の資産保全の姿勢があったからこそです。現在でも残る一級の百万石文化が商人の底力によると言われる所以です。

荒子のむかし

現在の荒子は、愛知県名古屋市中川区の中で荒子学区と言われる地域として知られています。利家当時の面影を残す主なものとしては、尾張四観音の一つである荒子観音と荒子城跡の富士天満宮に代表されます。

前田氏がこの界隈に根付く以前を見ると、名古屋でも本当に海寄りの地域で沼地に近かったようなのです。実際、縄文時代には中川区はまだ海底だったことが確認されています。古墳時代に入って、ようやく弥生時代からの穀物農耕が発達し、作物を他の場所へ運んで長期間貯蔵し始めて、農耕に従事する者とそうでない者との分業が生まれ出すにつれ、人が集まり始めたようです。

本格的に中川区に人が住みついたと推定されるのは、荒子観音の裏の畑地から古墳時代後期（7世紀頃）の提瓶［ていへい］が出土した時期をもってするのが大方の意見です。「古事記」にも崇神天皇の頃に「また尾張連（おわりのむらじ）の祖先の意富阿麻此売（おおのあまひめ）をめとり……」とあり、伊勢湾一帯に海人［あま］と呼ばれた漁民が住みはじめたことが知られます。

そして年月を積み重ねながら多くの気候の変化や河川の氾濫が繰り返される中で徐々に陸地となり、農耕が発達して人々の住む範囲が広がって行ったことがうかがえるのです。

こうした過程の中での「荒子」の具体的いわれ等については、「中川区風土記」に収録されている〝むかしばなし〟から知ることが出来ます。

まず地理的なことについては、ここは中世の荘園の中を流れていて名付けられた庄内川の一支流の荒子川の付近になります。〝正和4年（1315）に庄内川で大水があり、その下流に新しい沖積地ができたのが、事のおこりで、富田荘と一楊御厨［いちやなぎみくりや……神宮の領地で、ここより伊勢神宮へ献上米があったところ］との間で争いが起こりました。その争いが34年も続いたそうです。その一楊御厨の中央に荒子がありました。〟

又名前については、〃荒子とはアラキ村というなまりで、発音が変化したということです。その意味は開墾したばかりの荒田圃[あらたんぼ]のことです。〃といわれ、肥沃な土地に変わりつつあった当時を彷彿とさせてくれます。

前田一族と荒子城

富士権現社の境内にある荒子城跡の立札には、「天文年間(1532～1555)前田利昌が築城、その長男利久、４男利家、利家の長男利長が相次いで居城。天正３年(1575)利家が越前北の庄※(現在の福井市)に移り、同９年(1581)利長も越前の府中(現在の武生市)に移り廃城となった。この城は「尾陽雑誌」「古城志」などに、東西約６８米、南北約５０米※※と記され、一重堀をめぐらした」と書かれてあります。

<※　史実は越前府中(現在の福井県武生市)説が有力>

<※※「寛文村々覚書」(１７世紀)には〃古城跡東西３８間、南北２８間、先

年前田又左衛門居城之由、今ハ畑ニ成ル″と記されてある>

ここに現されるように、当時の城は大変狭く、平地に簡単な柵や堀をめぐらしたような館か砦といったようなもので、せいぜい敵を見張るために屋根の上に″やぐら″を設けたのがそれらしさを見せていた程度だったのです。

利家は天文7年(1538)、尾張の国・愛知郡荒子村で、利昌(利春)の4男として誕生し、いぬ年生まれであるために幼少の頃は犬千代と呼ばれていました。当時の荒子城の西には小さな堀があり、古城橋[ふるしろばし]と呼ばれる橋が掛かっており、南の大和ケ池のほとりに古い富士天満宮がありました。その境内には前田利家誕生の地という大きな石碑が今しっかりと立っています。

又「中川区風土記」によると、一説には利家は富田町大字前田にある速念寺で生まれ、7歳のときに、荒子に移り住んだともいわれています。

地元の人々に聞くと、荒子界隈には奥村姓が多いとのことです。前田家の祖先が、一の宮の奥町から連れて来た人々に先祖をたどれるらしいのです。血縁・地縁で固めた人々が、荒子川を戦略的に利用して団結していた当時が偲ばれて来ます。

事実、この荒子川流域には小魚を取ったり、細々と農業をしていた漁師・百姓が生計を立てておられる程この辺は当時海岸線に近い沼地であり、舟の出入りにも有利だったようです。通称″舟入[ふない]″とも呼ばれていたそうで、ためにちょっとした雨で洪水になって水が付くと、荒子観音の近くまで迫ったといいます。

こうした中で前田一族は利家の活躍する舞台を築いて来たのです。天文２０年(1551)１４歳のとき、利家は信長の小姓として仕えて領地５０貫を得、１７歳の元服で名前も孫四郎利家としました。以来、弘治2年(1556)稲生の戦いで右目を射られながらの戦いぶり等は、永禄元年(1558)に又左衛門と改めてから「槍の又左」と異名を取る程、武勇に優れ、信長に寵愛されたのです。しかし、信長の茶坊主を殺害したカドでしばらく疎遠になるのですが、美濃斎藤氏攻略の功で信長の勘気も解け、やがて永禄１２年(1569)に兄利久に代わり利家が荒子城主となることで、本格的な活躍の場が与えられたといえます。

利家はまず、当時まだ人々によく理解されていなかった信長の、時代に対する先見性を感じ取り、表の武力に対する、内の経済力を重要視した訳です。暴れ川といわれた荒子川に嫌気を持つことなく、むしろ如何に土木治水して農耕を発達させ、商人を呼び寄せて経済活動を活発化させるかにも心血を注いだことは重要なことです。

これは、荒子から身を起こして、信長や秀吉との関わりから多くの体験を通じて知恵を育くませて来た利家が、後になっての加賀金沢の地での浅野川・犀川の土木治水を通じて百万石経済から百万石文化を発展させて行った貴重な素地につながって行くのです。

荒子ごんげんの由来　（荒子郷土史家：奥村鉦二氏より）

静かな朝、ごんげんさまの鳥居をくぐると奥ゆかしい梅の香が漂い私共を清めてくれる。神殿に向かい、礼拝する、そこにさい銭箱が目に入る、右に桐の紋、左に梅鉢の紋が浮き出て見える。

桐の紋は皇后陛下のご紋である。

富士天満宮は、荒子城主前田利家が富士山麓の浅間神社の分神を受け、荒子城内鎮守の神として勧請された社である。[利家永禄１２年(1569)荒子城主となる]

富士天満宮のご祭神は木花咲耶姫で神武天皇の生母であると古事記にあり、桐の紋のゆかりはここにある。

天満宮は前田利家の祖先である菅原道実公が祖先であることについては一致している。荒子観音寺「浄海山雑記」によれば、「菅原道実公大宰府にうつり、ここで二子をもうける、長男は前田の姓を名のり、その子孫尾張の荒子に住す云々」とある。

梅鉢は前田家の家紋であり、天満宮の象徴である。

さい銭箱のこの二つの紋は私共の祖先の敬虔な誇りの表れである。

ごんげんさまは梅の花にも似て規模も小さく質素であるが、史実も正確で由緒深く、ここに住むものの崇敬の的である。

利家の深慮と祭神の尊さに唯々恐く、私共の使命の重さを知らされる。

荒子観音とともに栄えた荒子町

利家は信長より越前府中(現在の福井県武生市)を与えられ、初めて荒子を後にする折、自分が育った郷土を代表する荒子観音の再建を寺西十郎、奥村某に命じています。

確かに目的を遂行するためには、信長譲りの合理主義で一見冷酷なくらいにして次々と実績を積み重ねて行った利家ですが、それだけでは地縁・血縁を中心とした家臣団が付いてくるはずがありません。機能性だけで人間を判断することなく、不合理ともいえる人の心を捕らえる人間味を必要にして十分に持ち合わせていたからなのでしょう。

〝浄海山円龍院観音寺〟の文字が正面の山門脇の石碑に書かれており、本坊に入ると秘蔵の前田利家肖像画の掛け軸が大切に保管されており、そこには「人」「物」「金」の総合力を持って土豪から加賀百万石の土台を築いた風貌が拝見されます。

観音寺の歴史は古く、天平元年(729)天台宗の泰澄和尚の草創にまで遡のぼり、始め高畑町の北八田町の境にあったもの(「荒子観音寺略縁記」より)を鎌倉時代以降に現在地に移したのだそうです。境内には天文2年(1533)に再建された国の重要文化財である多宝塔が室町時代の建築様式の特色を残しています。

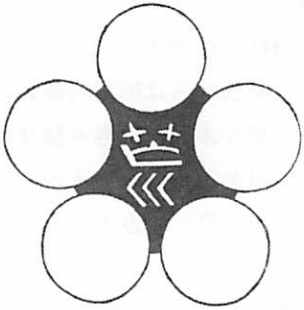
天正4年(1576)に利家が復興したのを機に江戸時代からは尾張四観音の1つとして栄え、山門前の東西の通りは門前町として荒子本通りの名を馳せた賑わいを呈していました。年1回の節分の折には多くの老若男女が集まることは勿論、年中人通りが絶えることがなかったといいます。最近は多少寂れたとはいえ、現在でもなお名古屋の人々の心を捕らえています。

又、明暦年間(1655〜58)当時の住職円盛の要請で、ここを訪れた放浪の僧として有名な円空が、山門の仁王様(金剛力士像)を始め、その余材で作ったといわれる千体を超える仏を残していることでも有名です。

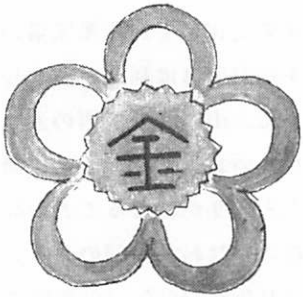
現代の中川区荒子界隈　(利家復興へ向けての情熱)

中川区は名古屋市の西南部に位置し、面積は３２．４㎢で市域の１０％を占め、人口は１９７，０７８人を数え市内第１位となっています。さらに２４の学区に分かれ、荒子学区はその中でも１８，６７４人(それぞれ昭和６３年７月１日現在)と最大の人口を誇っています。

昭和４４年に市電が廃止されるまでは、素朴な中川区の中では荒子観音界隈は大変にハイカラな所でした。しかし、交通の不便さからか年１回の節分の折以外寂れ出し、まとまった商店街が荒子地区から消えつつあります。ただ、昭和５７年に地下鉄の東山線が高畑駅(区役所の場所)まで開通することで新たな発展の基礎が作られつつあります。区民意識も高揚し、前田利家を中心とする歴史遺産を守る気風も一層高まって来ております。



荒子小学校の校章



金沢市立小学校の帽子の統一紋章

確かに愛知県には、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康と天下人が次々と輩出した中で前田利家は実力を備えながら表にでしゃばることなく裏方に徹したきらいがあり、そこに荒子学区を始めとする中川区の人々が郷土の英雄として深く心を通わせる要因があるのではないでしょうか。利家が出世して行った百万石・金沢の動向については大きな愛着すら感じているようです。

中川区の公式パンフレット等には必ず前田利家の名前が明記されていますし、荒子小学校を訪れてみれば、校章に梅鉢の紋が使われている位です。金沢市の小学校の帽子の統一紋章が、梅鉢の紋の中に「金」の字が配置されているのに対し<※最近は黄色の安全帽子の使用であまりかぶらなくなっているが>、荒子小学校のそれは、同じ紋の中に「荒」の字が配置されているのです。

荒子小学校の初代校歌を見ると

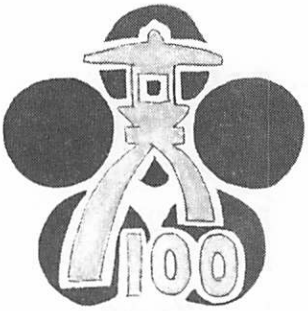
「一、金鯱かがやく中京の
西を流れる荒子川
これ利家の生まれし地
これ利家の育ちし地
観世音寺の名と共に
我等の里の誇りなり
勇む荒子の健男子

二、集る我等一千人
体を鍛え知を磨き
世に出ん春の時何処
高き理想の梅鉢の
薫る記章になぞらへて
行手の空に光みゆ
学びのわざに勇まん」

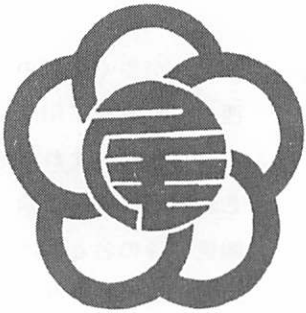
とあり、荒子人気質というか中川区民気質が如実に現されているのを知らされたのです。又、小学校を卒業生するに際しては、『梅と槍と百萬石』という前田利家について書かれた小冊子が全員に配布されます。かつ、戦後に復活した〝前田賞〟という優秀生徒男女各１名に贈る賞の存在等、ますます利家出身の町の面目が現されています。

近年、名前だけの英雄が持て囃されている中、地に足のついた前田利家に何とか陽の目を当てさせたいと願うのは筋の通らないことではありません。荒子で金沢の現在を作った者が田を耕し、荒子川で魚を取ったということですが、仮に姓もない小者であったとしても、歴史を遡のぼって水を飲み合った中に間違いはなく、血の騒ぎを感じ合える者同志です。

幸いに昭和６４年は名古屋市政１００年を迎えますし、金沢も同じく１００年を迎えます。夢起こしとして中川区と金沢・尾張町で前田利家ゆかりの何かをしてみたいものです。



金沢市制１００周年シンボルマーク



尾張町商店街のシンボルマーク

馬道具の保存にかける人々　(馬道具保存会の資料より原文転記)

◆荒子の馬の塔[おまんと]と馬道具[ばどん]の由来

加賀藩主前田利家公は、天文７年(1538)に生まれ、織田信長に仕え荒子城主として居城していました。幼い頃から、荒子観音を深く信仰し、１４才の初陣より、多くの戦いに参加し、大きな手柄をたてました。その戦功により、天正３年(1575)越前府中(現在の福井県武生市)に領地替えとなり、荒子から移ることになりました。この時、荒子観音の本殿を建てかえ、その年の大祭当日(毎年５月１８日)に、馬の塔(馬に道具をつけ村中そろって神仏に祈願すること)を行い、飾った馬を７頭献上し、自分の出世に対して感謝をあらわしたことが起源といわれています。その後も、馬道具は荒子七ヵ村(屋敷)に引き継がれました。

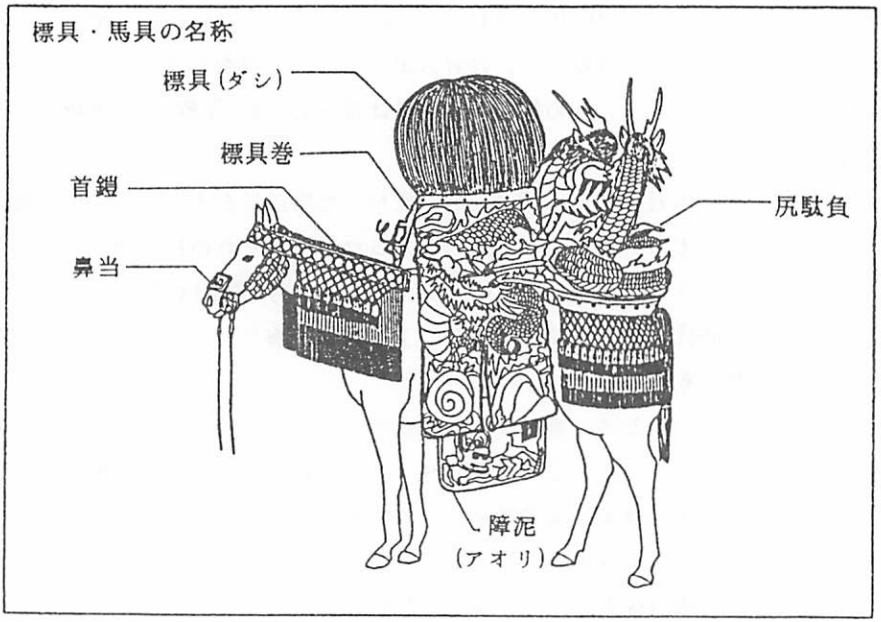
それから長い年月がたち、利家公から授かった馬道具も古くなり、江戸時代に新しく作りかえられ形も大きく変わりました。それぞれの村(屋敷)ごとに競って作ったため、たいへん立派なものとなりました。村(屋敷)の数も人口とともに増え、大正時代には１４屋敷となり、１４頭馬を飾りたてた馬の塔の行列はたいへん立派なものでした。

しかし、残念なことに、第二次世界大戦で半数以上が焼けたり、こわれたりしてしまいました。現在も完全な形で残っているものは、文化財に指定されている３つだけです。戦後、馬道具をつけて出動したのは３回で、一番最近の出動は昭和３９年の荒子観音鐘つき堂竣工のときでした。

最近は近くに適当な馬がいなくなり、昔のような馬の塔ができなくなりました。(馬道具は総重量が２００kgほどあり、競馬用の馬では飾りつけて３～４時間も練り歩くことはできません)

ちなみに昔の記録によると、江戸時代寛文１１年(1671)の荒子村には戸数が

１８５戸、人口が１，１８０人、馬は７５頭もいたということです。このように、当時は草競馬とともに馬の塔がたいへん盛んでした。



名古屋市中川区荒子町（大中脇屋敷）馬道具保存会

今日展示されている馬道具は、明治時代の中頃に作られた荒子でも代表的なもので、昭和４８年１０月１５日に名古屋市民俗文化財に指定されています。昭和５９年２月には、東海テレビで前田利家公にゆかりのある馬道具として放送され、多くの人の関心を集めました。又、昭和６１年６月には前田氏の城下町として栄えた石川県金沢市から、利家公と関わりの深い荒子の馬道具を「百万石祭り」にぜひ出品してほしいというお願いがあり、金沢市文化ホールに出品展示し、金沢の人達からも大変好評を得ました。

あとがき

１つの素朴な興味が情熱を燃え上がらせ、１つの機会を与えてくれることになりました。金沢の生い立ちから、前田利家と尾張町の縁を知り、ひいては名古屋市中川区荒子町にまで範囲が広がり、ついには昨年１１月に訪問する感慨をも味わうことが出来ました。

そのため今回のシリーズでは、荒子学区長さんや同郷土史家の方々、中川区役所の皆様を始めとして、遠く祖先が築いた金沢の地に愛着を寄せる荒子地域の人々よりの話を中心として述べさせてもらいました。又、「中川区史」「中川区風土記」を始めとし、現地の方から頂いた貴重な資料を随時参考に作成させてもらいましたことを記しておきます。

特に中川区役所区民室の方々や、神谷荒子学区長様はじめ、地元郷土史家の方々により、最新資料による原稿確認を行って頂いたことに深く感謝しております。これも同じ血を遠い過去に分け合った関係の賜物でしょうか。

時を超えた人の心の結び付きの不思議さに対し、改めて深くお礼申し上げます。願えれば荒子と金沢(尾張町)が今後の新たな交流を下に発展して行くことのきっかけとなればと考えております。

尚、本文中で至らぬ点、お気付きのことがあれば、今後の勉強のためにも是非共お知らせ頂ければ幸いです。

１９８８年９月発行
尾張町商店街振興組合
理事長　　山田　勝二
尾張町若手会
会　長　　武部　守男
編集責任　石野　琇一
金沢市尾張町一丁目１１番８号